

# 文学研究における「再現性」

## ——魯迅は再現可能な存在なのか——

高橋 俊

### 1. はじめに

国破山河在  
城春草木深

と始まる、誰もが知っている杜甫の詩を、唐時代の中国に生きたある人物が、ある特定の状況で実際に抱いた感情の報告だと考えてよいだろうか。そうすることは、この詩が、まったく異なる時代に異なる状況のもとに暮らす人々にも感動を与えることを説明できない。そうしたことが可能であるのは、ここで描かれているような感情を杜甫が実際にもったかどうかとも、そうした感情を生み出した状況が現実のものか架空のものかとも独立に内容をもつものとして、この詩が受け取られているからだろう。<sup>1</sup>

これは哲学者による「文学評」だが、文学研究の有り様をよく表していると思われる。我々文学研究者は、文学は世界共通語だという意識を抱いており、「まったく異なる時代に異なる状況のもとに暮らす人々」が共有できるものであると考える。そういう前提があるからこそ、1000年以上前の、しかも異なる場所に生きた人物が書いた作品に、あれこれ批評を加えることができるわけである。

これは別の言葉でいえば、本稿のテーマである「再現性」となるであろう。「春望」は時や場所を越えて人々に感動を与える、とはすなわち「春望」の感動には「再現性」がある、と言い表せる。

一方で、社会学者の盛山和夫はこう述べる<sup>2</sup>。

[...] 人文学と社会科学においては部分的には自然科学と同じような経験的検証にかけることのできる側面もあるが、根本的には、それは不可能であ

<sup>1</sup> 飯田隆『分析哲学 これからとこれまで』（勁草書房、2020）p.4。

<sup>2</sup> 盛山和夫「公共社会学は何をめざすかーグローバル化する世界の中でー」（『社会学評論』68-1、2017）。

(2)

る。なぜなら、人文学と社会科学が探求しようとしている対象は「意味世界」であって、外的な自然的世界ではないからである。[中略]

[...] たとえばハーバマスの『公共性の構造転換』における次のような言明の真偽や意味を考えてみよう。

公衆がそこで成立する「世界」とは、社会圏としての公共性を指す言葉である……世界はその純粋な相では、理性的存在の間の意思疎通において作り上げられる。

[...] さて、このハーバマスの言明ははたして経験的にチェックすることができるだろうか。あきらかに不可能である。たとえば、経験的にどんな現象が存在すれば、それは「公衆がそこで成立する『世界』」だと言えるのか。あるいは、どのような意思疎通であればそれは「理性的存在」の間のものだと言えるのか。そうしたことは一切経験的に確かめようがない。

ここで「経験的」といわれているものも、おおむね「再現性」あるいは「実証性」などの言葉で言い表せよう。「世界は理性的存在の間の意思疎通において作り上げられる」なる命題は、どのような実証や検証をどの程度重ねれば真実と見なせるのか（あるいは否定できるのか）、誰にもわからないし誰も規定できない。いつてみれば「言いつばなし」もしくは「言ったもの勝ち」の言説である。盛山は続けて「この言明は、彼 [ハーバマス：高橋注] が想定するある「望ましい」社会的世界のあり方を語っているのである。これはいわば「規範的な」言明である」とし、「人文社会系の学問の骨格をなしているのは、こうした理念的な世界構築である」とした上で、現代はそうした「規範」や「大きな物語」が失われたために、人文社会系学問に危機が迫っている、と述べる。

自然科学において、再現性は何よりも重要である。実験結果は、世界中のどこで・誰が行っても、再現されなくてはならない。STAP細胞が「捏造」とされたのはその実験結果に再現性がなかったからであり、発見者とされた研究者は研究者生命を事実上絶たれた。

自然科学において研究の核心といえる再現性であるが、近年、それが疑われる事態が頻発している。心理学では、ジャーナルに掲載された論文の多くに再現性が認められなかったということが、メディアにより大きく取り上げられた<sup>3</sup>。心理

<sup>3</sup> 三浦麻子「心理学における追試—これまでとこれから」(『科学』2022-9)。元木康介・米満文哉・有賀敦紀「消費者行動研究における再現性問題と研究実践」(『消費者行動研究』27-1,2, 2021)によると、代表的な心理学ジャーナルに掲載された100本の論文のうち再現さ

学においては、これが分野全体の危機とされ、多くの「反省」や「解決策」が提出されているが、先に挙げた盛山は、文系の学問分野においては、再現性をいかに担保するのか、という点において危機感を抱いているのである。

本稿では、文学研究における再現性というテーマについて考えてみたい。その際、社会学や地理学などの分野との比較から検証する、という手法をとる。文学研究の特徴は、他分野との比較から浮かび上がると思われるからである。

## 2. 文学における「規範から実証へ」

学問とは基本的に「原因」と「結果」の因果性を明らかにするものである<sup>4</sup>。「Aというモノ／コトがある」を「結果（前提）」として、「では、これは何に由来するのか」という「原因」を実験や資料収集によって明らかにするのが、一般に研究といわれる行為である。では文学研究において「原因」と「結果」はそれぞれどのように考えられていたのか。ここでは「はじめに」でも触れた「規範」と「実証」という二つの研究スタイルにおいて考えていきたい<sup>5</sup>。

文学研究において、「規範」的とはすなわち「作家論」だったといえるであろう。中国近現代文学においては魯迅研究が典型的である。1980年代までの「魯迅論」は、魯迅という一人の人物とその作品とを渾然一体とさせた形で「規範」と設定した上で、魯迅が「規範的人物」となった理由を「生い立ち」や「経験」や「執筆当時の精神状態」等に求めていく、というものであった。彼が残した素晴らしい作品群を「結果（前提）」に据えた上で、地主の裕福な家に生まれるも、祖父が科擧の不正の廉で獄につながれ、家が急速に没落し、やがて医者を目指して日本に留学するも、「幻灯事件」をきっかけに文学に転向し、日本で雑誌を創刊するもまったく売れない上に同志が次々に逃亡し、絶望して中国に帰国し役人になったところで友人に創作を頼まれた、等という「事実」を「原因」として提出するのが、1980年代までの典型的な「魯迅論」であった<sup>6</sup>。

---

れたものは全体の36%だったという。この問題の発端としては、Meredith Wadman, NIH mulls rules for validating key results, *Science*, 31 Jul 2013 が挙げられることが多い。

科学における「再現性」については、松村一志『エビデンスの社会学—証言の消滅と真理の現在—』（青土社、2021）を参照。もちろん、「一方向にしか流れない時間軸においてまったく完全に同じ条件、同じ環境というものは極論ではなく原理として不可能であり、（伝統的）科学の根幹は極めて軟弱な仮説を土台としているとも言える」（國吉康夫「ロボティック・サイエンス論：科学における再現性と一回性」『といとうとい』第0号、2021）ことはいうまでもない。

<sup>4</sup> 前田健太郎「事例研究における根本的な原因の発見」（『国家学会雑誌』129-1,2、2016）。

<sup>5</sup> 経済学では、規範的モデルと実証的モデルが、研究の二つのグループとして、対立的に用いられるという。吉田敬『社会科学の哲学入門』（勁草書房、2021）p.95を参照。

<sup>6</sup> こうした作家の事跡は、往々にして作家自身が書いた自伝的文章が基となっており、信憑

(4)

作家論においては、作家を「状況に抗う者」すなわち「特殊な存在」として提示することが多かった。「魯迅論」においても、「魯迅は中国において何千年にわたって受け継がれてきた封建的な空気に反抗し云々」と論じられるのが常であった。「精神勝利法」が典型であり、中国社会に蔓延していたこの精神状態を、魯迅は「阿 Q 正伝」によって告発した、ということになっている。同時代にあって、魯迅は「特殊」であり「特異」であり「外れ値」であったのである。

こうした作家論は、「規範」を提示するのが目的だったといえる。魯迅研究は、模範の人物である魯迅の「人間性」に少しでも近づく、という名目で行われていた。それらの研究では「魯迅精神」という言葉がよく使われたが、魯迅の生涯や作品から「魯迅精神」を作り上げた成分を探り当て、抽出するという行為は、化学実験になぞらえられる営みだった、といえるのではなからうか。

とはいえ、「魯迅精神」を構成する諸成分を割り出し、「幻灯事件」がそれにあたる結論を出したとして、それを我々が「追体験」することは不可能である。そこで「次善の策」として、魯迅の作品を「正しく読む」ことが目指される。そうすれば「魯迅精神」を自己に注入でき、「魯迅精神」に多少なりとも近づけるのだ、という効用が設定されていた<sup>7</sup>。魯迅だけではない。夏目漱石やドフトエフスキーのような各国の「文豪」と呼ばれる作家は、作品の素晴らしさと同時に、人格の高潔さが賞揚されることが多かった。作品の素晴らしさはそのまま作者の人格的な素晴らしさに結びつけられたのである。一方で、太宰治やエドガー・アラン・ポー、あるいは郁達夫のような「破滅型」の作家は、「自らの弱さを赤裸々に描いた」と、また別の方向から「人間性」を評価された。

しかし1990年代に入ると、「規範」的な作家論が減少し、代わりに歴史研究に寄った「実証」的な研究が主流になった<sup>8</sup>。作者が活動・執筆していた当時の社会状況を歴史史料から明らかにし、そうした社会状況を作品に当てはめて考察するような研究方法である。こうした変化がもたらされた要因は種々あるだろうが、一つには「科学的」な研究が志向されるようになった、という点が挙げられるだろう。「歴史は科学か」については多くの議論があるが<sup>9</sup>、「実証」に関しては文学

---

性に疑いがある場合が少なくない。魯迅でいえば、『『呐喊』自序』の「祖父が死んで家が傾き、魯迅自身が質屋通いをするようになった」という部分は、創作である可能性が指摘されているし、「幻灯事件」も、その出来事が本当にあったのかを検証する術がないことは、いうまでもない。

<sup>7</sup> 橋本努『社会科学の人間学—自習主義のプロジェクト—』（勁草書房、1999）。同書では、マックス・ウェーバー研究が「著書を読むことで作者の精神に近づく」ことを目的として行われていた、としている。

<sup>8</sup> この経緯については、拙稿「パパ、中国現代文学研究は何の役に立つの？」（中国モダニズム研究会編『夜の華—中国モダニズム研究会論集—』中国文庫、2021）を参照。

<sup>9</sup> エドワルト・マイヤー、マックス・ウェーバー『歴史は科学か』（森岡弘通訳、みすず書

研究よりも厳密であると思われていた歴史研究の手法を、文学研究が真似たのである。さらに、この時期に一気に浸透した「カルチュラルスタディーズ」や「脱構築」も、この変化を後押しした。これらは「権威」を疑い、「権威」とされていた人物を「特権的」な地位から引きずり下ろす（今風にいえば「キャンセルする」）運動であったが、文学研究でその標的になったのが、「規範」的な作家論だった。それまで「特権的」な地位を占めていた魯迅や夏目漱石らの「文豪」が「一人の人間」とされ、場合によっては家父長制の権化として批判すらされるようになったのである。

中国現代文学においては、鈴木将久「メディア空間上海—「子夜」を読むこと—」<sup>10</sup>が、「実証的文学研究」の嚆矢とされる。鈴木は、当時の上海における新聞の発行部数などの統計資料を引用し、「当時の時代背景」をたんに作家の小説やエッセイなどからの断片的な記述からではなく、歴史研究的な水準で明らかにした上で、そこから「子夜」の記述を裏づける、というスタイルをとる。まずは作家の生い立ちを（「自伝の記述」レベルで）調べる、というのが当たり前だった中国現代文学研究に、この論文は大きな衝撃を与えた（なお同論文には、「子夜」の作者である茅盾の名前は一度も出てこない）。以後、作者の人となりや事跡は参照しつつも、それを「規範」にすることのない文学研究が次々に登場し、やがては一般的になっていった。現在では、魯迅に何らかの規範を読み込むような研究は、少なくとも日本ではほとんどなくなったといっていいただろう。

「規範から実証へ」の変化によって何が起こったかという、文学研究における「原因」の変化である。「規範」時代の文学研究では、原因は「作家」に求められていた。ゆえに、研究では何はさておき作家の事績を調べるのが常であった。作家の生い立ちや経験は特別視され、「こうした稀有な経験をして、常ならざる努力をしたからこそ、偉大な人格が誕生し、偉大な作品を生み出したのだ」と論じられた。ところが「実証」研究においては、「原因」は「時代背景」である。研究においては当時の社会状況こそが重要であり、作家も作品も、「時代の空気」の中で、その「空気」を表現したものの、という役割を与えられるようになる（これについては後述）。

---

房、1965）においては、巻頭のマイヤー「歴史の理論と方法」の最初の一文中、「歴史は何ら体系的な科学ではない」と断言されている。ただ、1980年代までは有力であったマルクス主義的歴史学が明確に「科学」を指向していたことは疑いを得ないし、また「科学」を構成する要素の1つである再現性を重視する学問であったことは間違いない。さらに、フランスのアナル学派は数量的手法によって歴史研究の「科学化」を目指したといえよう。矢野久・難波ちづる「人文科学から社会科学への歴史学の転換—フランソワ・シミアンの歴史的方法批判をめぐって」（『三田学会雑誌』Vol.108 No.2、2015）。

<sup>10</sup> 『東洋文化』74、1994。

(6)

文学研究における「規範から実証へ」の変化は、すなわち「原因」の「作家から時代背景へ」の変化であるともいえるが、「時代背景」以外にもう一つ、「原因」となりうる要素が存在する。それは「地域性」である。

### 3. 地理学から文学を考える

#### 3.1 文化地理学とは何か

本章では「地域性」を「原因」とした文学研究について見ていくが、その前提として、地理学という学問分野について概観しよう。

地理学とは、「なぜ、この場所でこれが起こるのか」を解き明かす学問である。すなわち、「モノヤコト（結果・前提）」の「原因」を「地理的環境」に設定する。「飛行機から見える大地の姿に目を奪われたことはありませんか。地理学は、このような地表上の空間的しくみ（地の理）に強い関心をもっています」<sup>11</sup>とあるように、「地（場）」に「理（ことわり）」を読み込む。

地理学は大きく人文地理学と自然地理学とに分かれるが、それぞれに多くの下位分野がある。ここでは、文化地理学という分野を考えていこう。この分野については久武哲也『文化地理学の系譜』<sup>12</sup>という大著がきわめて的確にまとめている。本節では、同書をもとに、その研究史を見ていく。

『文化地理学の系譜』は、おもにカール・オルトヴィン・サウアー [Carl Ortwin Sauer, 1889～1975] の事跡から、文化地理学の歴史をまとめている。サウアーは、ドイツの景観論をアメリカに導入したことで知られる学者である。当初、当時アメリカの地理学の中心であったシカゴ大学で学び、ミシガン大学で教鞭をとるが、中西部で行われている研究への違和感からカリフォルニア大学バークレー校に移り、そこで「バークレー学派」と呼ばれる地理学の一大学術潮流を形成することになった。

「サウアー地理学」の特徴は、環境－人間－文化を独立した三つの要素として定位し、「環境自身が文化からの作用をうけた存在として見ていく」<sup>13</sup>というものである。サウアーが教育を受けた当時、アメリカの地理学で主流だったのは、中西部のいわゆる「シカゴ学派」の流れをくむものであり、その地理学とは「土地利用の地図化と分数符号方式の操作的分類を指向するもの」であり、文化とは「合衆国地質調査所発行の地形図の上に黒色で印刷された『人工物』（works of man）」

---

<sup>11</sup> 広島大学文学部 HP ([https://www.hiroshima-u.ac.jp/bungaku/faculty/program/program\\_03/geo-geography](https://www.hiroshima-u.ac.jp/bungaku/faculty/program/program_03/geo-geography) 2022年10月22日最終アクセス) より。

<sup>12</sup> 地人書房、2000。以下、同書からの引用は「久武、頁」で示す。

<sup>13</sup> 久武、150。

を示すもの」であった<sup>14</sup>。そこでは、環境と人間（文化）を二元的に捉え、環境は人間に一方的に影響を与えるものとされてきた。サウアーはまず「地理的影響」という観点を批判し、文化を「人間が作り上げたもの」であり、それこそが、環境に作用するものと考えた。つまり、環境と人間の二元論に、「文化」という概念を介在させることにより、統合を果たそうとしたのであった<sup>15</sup>。彼は地理的環境による決定論や機能主義、あるいは普遍的な文化進化論を退け、ある種の文化相対主義を指向するようになる。

興味深いのは、サウアーの文化地理学が、文化を語る際の「科学的であるべし」という圧力への反発から生まれたことである<sup>16</sup>。当時の地理学において主流であった「学問は社会科学であるべし」という観念において、その中にある「非合理的なもの」を扱うのがサウアーの特徴であり、パークレー学派の特徴であった<sup>17</sup>。

サウアーが参照したドイツ景観論は、「偉大な外国誌 (Auslandskunde) の時代の終焉と郷土誌 (Heimatkunde) への回帰を示すもの」<sup>18</sup>だとみなされていた。「ドイツやフランスでは、こうした地誌が興隆するナショナリズムや民族主義を支える新しい分野として確立しつつあった」<sup>19</sup>。ドイツにおいては「郷土学」という教育カリキュラムへと結びつき、その影響を受け、日本でも明治二〇年代から「西欧の文明化の圧倒的な浸透に対する一つの反省として、日本の伝統を見直そうという動きが起」こり、「地方」への関心がたかまり<sup>20</sup>、1890年代後半期からは「郷土化教育」が東京高等師範学校の附属小学校で実験的に開始されたという<sup>21</sup>。

以上のように文化地理学の概要をまとめた時、必ず出てくる疑問が、「それは環境決定論ではないか」であろう。日本における地理学の名著とされる和辻哲郎『風土』も、「常に地理学の中では、環境決定論として忌避されてきた」<sup>22</sup>。「こういう地理的環境に住む人々はこういう性質になる」などと決めつけられるわけがない、というのは当然の疑問であろう。こうした命題を真とするならば、同じ土地に住む人間はすべて同じ性質を持つという、およそ認めることはできない結論に同意せざるを得なくなってしまう<sup>23</sup>。

<sup>14</sup> 久武哲也「アメリカ文化地理学の成立と発展—C.O.サウアーとパークレー学派の役割—」(『人文地理』39-4、1987)。

<sup>15</sup> 久武、183。

<sup>16</sup> 久武、300～301。

<sup>17</sup> 久武、391。

<sup>18</sup> 久武、266。

<sup>19</sup> 久武、412。

<sup>20</sup> 久武、418。

<sup>21</sup> 久武、412。

<sup>22</sup> 松本淳「地理学と風土」(『日本地理学会発表要旨集』2020)。

<sup>23</sup> 地理的環境決定論といえ、一般的にはジャレッド・ダイヤモンド『銃・病原菌・鉄』(倉

(8)

地理学はこうした批判につねに向き合い、「環境決定論」に陥ることを避けつつ、それでも地理的環境に「原因」を求めてきた学問であるといえる。次節では、文化地理学に強い影響を受けて誕生した、文学地理学という分野について見ていこう。

### 3.2 文学地理学とは何か

文学地理学については、「初めて聞いた」という人がほとんどではないだろうか。例えば CiNii で「文学地理学」と検索してヒットする論文は 9 件に過ぎない<sup>24</sup>。しかし中国においては、この分野は近年、なかなか活況を呈している。CNKI（中国学術文献オンラインサービス）で検索すると、821 件の論文がヒットする<sup>25</sup>。しかも、論文や記事のほとんどが 2010 年以降のものであり、きわめて新しい学問分野であることがわかる。

文学地理学の第一人者は、曾大興という研究者である。1958 年、湖北省赤壁生まれ。現在は広州大学中文系の教授であり、文学地理学のテキスト『文学地理学概論』<sup>26</sup>を執筆するなど、この分野において多くの業績を挙げている。なお前節で紹介した文化地理学の始祖・サウアーは、『文学地理学概論』中にしばしば登場する（中国語では「索爾」）。

文学地理学の特徴としてしばしば強調されるのは「現場」である。

強調すべきは、文学地理学の研究と文学史の研究とが大きく異なることである。文学史の研究は書斎の中で利用できる文献によって進行するものだが、文学地理学研究は文献資料を使う以外に、書斎を出て、作家の生まれ、成長した土地や、流れ着いた土地、作品が生まれた土地、そして作品が描写する自然・人文景観と地理空間においても実地で考察を行わねばならず、そのため文化人類学やフィールド調査も特に注意する必要がある。<sup>27</sup>

---

骨彰訳、草思社、2000。原著は 1997）が有名であろう。同書は農業に適した環境で生まれた文明こそが世界を「征服」したのだと結論づける。しかし彼の著作は地理学者から猛烈な批判を浴びた。日本の地理学者の反応は、二村太郎・荒又美陽・成瀬厚・杉山和明「日本の地理学は『銃・病原菌・鉄』をいかに語るのか—英語圏と日本における受容過程の比較検討から—」（『E-journal GEO』7-2、2012）。

<sup>24</sup> ただし、文学地理学という名称はついていないが、たとえば日本文学における飯倉洋一らの「デジタル文学地図」の取り組みは、文学地理学のコンセプトに近い研究であるといえよう。

<sup>25</sup> CiNii と CNKI の検索はともに 2022 年 10 月 22 日。

<sup>26</sup> 商務印書館、2017。以下、同書からの引用は「曾、頁」で示す。

<sup>27</sup> 曾、14～15。

彼はこのように述べた上で、文学地理学とこれまでの文学研究との違いを文学と地理的環境との相互作用におく。

では文学地理学は、文学をどういう手法で論じていくのか。『文学地理学概論』を見ると、文学事象を「作者」「作品」「流通」の大きく3つに分け、それぞれに「地域性」を読み込む。「作者」は作者の生まれ育った場所・訪問した場所・執筆した場所。「作品」は作品内に登場する場所。そして「流通」は作品が読まれた場所。たとえば李白を例にとると、「彼は綿州彰明一帯の地理環境の中で成長した。ここは道教の雰囲気が濃厚な地域で、任侠の気に溢れた地域でもある。[中略]彼が早年にここで受けた本籍文化の薫陶、そしてこれによって形成された文化的心理構造は、彼の生涯の価値観、行動の選択、そして創作に強い影響を与えた」<sup>28</sup>と論じられ、杜甫は「祖籍は襄州襄陽（今の湖北襄陽）、河南鞏県（今の河南鞏義）の洛陽一帯で生まれ育った。彼の家庭は西晋から続く儒教を奉じ官を守り、彼が生まれ育った鞏県や洛陽一帯は、濃厚な儒家文化に溢れていた。このような地域文化は、彼の忠君にして仁愛の思想を核心とした文化的心理構造の形成に対し、大きな影響を与えたことは疑いを得ない」<sup>29</sup>と論じられる。

こうした研究に対し疑いの目を向ける人は多いだろうし、さらには偉大な作家たちへの冒瀆と見なす者もいるだろう。なぜなら、「李白は成都出身だからこうした作品を書いた」ということは、「成都出身であればこうした作品は誰でも書ける」ということにもつながるから。もちろん、『文学地理学概論』も、地理的環境のみが作家や作品の性質を決めるわけではない、ということが再三強調されている。しかしながら、文学地理学の研究が、作品を「作家の出身地」に帰すものであることは、疑いを得ない。それは、第1章で論じた「作家の生まれた時代」と同じく、作家個人の特異性や特殊性を無視するものである。しかもこれは、地理学がつねに「内省」しているように、環境決定論そのものである。一度錦州やら洛陽やらの「地域性」を定め、あとはその土地出身の作家の作品がこれに当てはまるかを確認するのが研究になってしまう。

さらにいえば、これがやがて、「中国人は、こういう文学を書く」「こういう文学を書くのは中国人だからだ」というナショナリズムの強化の道具につながる可能性もある。実際、『文学地理学概論』は、そういう可能性を濃厚に漂わせている。もちろん、「文学（研究）はナショナリズムとは距離を置くべきだ」と決めつけられるものではない。ナショナリズムを強化する文学作品や文学研究を頭から否定することもできないだろう。ただその場合、冒頭の引用のような「まったく異な

<sup>28</sup> 曾、132～133。

<sup>29</sup> 曾、133。

る時代に異なる状況のもとに暮らす人々にも感動を与える」という文学の効用は、放棄せざるを得ないだろう。ある国のナショナリズムを「外国人」が賛同し、賞賛することは、きわめて少ないであろうからである。

ここまで、文学研究における「作家」「時代背景」「地域性」という三種類の「原因」について見てきた。次章では、これらを総合した上で、文学研究の再現性について検討していこう。

#### 4. 文学研究における再現性と「作者の死」

「時代性」や「地域性」を「原因」に設定することは、長所と短所がある。

短所は、これらが作家・作品の価値を貶める方向で働く、ということである。「原因」を「時代性」に置くにしろ「地域性」に置くにしろ、「これらの環境がこの作品を書かせた」と論じるものであり、そこでは作者の能力や特殊性などというものは背景に退くか、そもそもまったく考慮されない（「メディア空間上海」において、作者である茅盾の名が一度も出てこないのを改めて想起されたい）。作者は自分が存在する状況の「空気」を読み、その「空気」をそのまま作品にしているだけ、ともいえることになる。

さらに、こうした研究は、作者を「その環境にいる者」あるいは「属性」の「代表」として扱う、ということにもなる。夏目漱石の「男性性」を作品から読み解く研究は少なくない。この場合、漱石は男性、あるいはホモソーシャルの代表として設定され、多くは批判的に言及されるだろう。「時代性」も同様である。漱石に明治を代表させる研究は、枚挙にいとまがない。しかし、それは本当に妥当なことなのだろうか。漱石に「男性」や「明治」を代表させることは、漱石に対しても、あるいは代表された者に対しても、どちらも暴力ではないのか？ 漱石にとっては、「なぜ、私が明治日本を代表しなければならないのか」となり、一方明治に生きた者たちにとっては、「なぜ、あの男（漱石）が我々を代表しなければならないのか」となるだろう。

多くの研究分野においては、サンプルに「代表性」が求められる。疫学や薬学の分野では、どこまで治験を繰り返せば「人間全体」に効果があるといえるのか（ある薬品の効果を調べるために任意の1万人へ治験を行ったとして、その1万人が人類を代表するといえるのか）がつねに問題となり<sup>30</sup>、社会学の調査では、インタビュー（「質的調査」）にしろアンケート（「量的調査」）にしろ、対象者には「外れ値」ではない「平均的」な人物が求められ、そうでないと「代表性に問題

<sup>30</sup> 門間陽樹「集団を対象とする疫学研究と N=1 研究」（『バイオメカニズム学会誌』42-1、2018）。

がある」と批判される<sup>31</sup>。一方文学研究において、作家や登場人物（たとえば「阿Q」）に何らかの属性やカテゴリーを代表させることは、ごく一般的に行われ、「代表性」が疑われることはほとんどない。しかし本来、それは乱暴なことなのではないか？ 「阿Qは民国期中国人男性の代表だ」と論じられて、それに「民国期中国人男性」に「いや、阿Qは私たちの代表などではない」と反論するチャンスは、与えられるのか？<sup>32</sup>

もちろん、「当事者」が望むと望まざるとに関わらず、「代表性」は与えられるのだ、という言い方は、可能だろう。「高橋俊は日本人男性なので、思考や言動には日本人男性の特徴が見られる」といわれれば、否定することは難しい。魯迅についても、「いくら彼が「民国期中国人男性」の封建制を批判したところで、彼自身がその憎むべき民国期中国人男性の一人であり、言説の端々にそれが感じられる」という命題も、同じく否定するのは難しいだろう。魯迅が「民国期を生きた中国人男性」であるのは紛うことのない事実であるし、魯迅自身も長い間に澱のように溜まり、受け継がれてきた「中国人男性」の特性を自分自身も受け継いでいると自覚しているからこそ、「狂人日記」の主人公に「自分も人を喰った」と自覚させたのではないか。やはり魯迅は、「民国期中国人男性」を代表する人物なのか？

しかしそうなると、魯迅には「民国期中国人男性」の性質に関するデータがまた一つ加わった、というだけの価値しか与えられないことになる。魯迅の作品に「この中には典型的な民国期中国人男性の徴候が見られる」とコメントを付し、「民国期中国人男性」のファイルに放り込むことが、研究になる。作家も、作品も、彼ら／彼女らが属するとされる何らかのカテゴリーの性質を明らかにするためのデータに過ぎなくなるのである。

近年の文学研究は、作家や登場人物の「属性」が重視され、その「代表性」を強調する方向に向かっているように思われる。「女性作家」の作品に「女性性」を読み込み、「女性の代表性」を読み込むような研究である。こうした研究がおかしいというわけではもちろんない。しかし、作品をこのように読み込むことは、ど

<sup>31</sup> 社会学の「質的調査」における代表性はつねに議論となっている。日本における質的調査の第一人者・岸政彦はこう語る。「質的調査が事実についてなにごとかを述べようとする、科学と文学の両方から、いわば挟み撃ちにされる。わずかなサンプルからどうやって代表性を確保し、誤差を除去するのだ？ ひとりの語り手の語りを一般化することは、暴力ではないのか？」（『実在と行為——社会学理論ができること——』『現代社会学理論研究』11、2017）。

<sup>32</sup> 代表性と特殊性のどちらを優先すべきかは、分野によってはつねに議論となっている。世界遺産の認定に際しての、「顕著性（卓越性）」と「代表性」の間での揺らぎを検討した筈島大悟「世界遺産の審査における「政治化」に関する研究：「顕著性」と「代表性」の議論を軸に」（『世界遺産研究』7、2019）は、この問題に対して極めて示唆に富む議論を展開している。

うしても、そのカテゴリー内部における典型的な語りが意識されてしまう<sup>33</sup>。「男性」にしる「女性」にしる「民国期中国人」にしる、内部は多様であるはずなのに、作家や作品にその「代表性」を期待し、さらには自らが期待する「代表性」に合う作家や作品を探してきて、データやサンプルの一つとする、ということが起こってくるのである。

「自分の主張に合うような資料を探す」ということは、研究においては一般的に禁忌とされる。しかし、文学研究においてはほとんど問題にはならない。これは、文学研究において、「好きな作家を研究テーマに選ぶ」ことが一般的とされているからであろう。文学研究者が何らかの主張を有していていたとして、同じ主張を持つ作家を好きになる（あるいは異なる主張を持つ作家に違和感を覚える）のは自然であるし、その作品に絡めて自己の主張を述べるということも、むしろ当たり前のことである。しかし、文学研究における「好きな作家を研究テーマに選ぶ」という習慣が、作家に安易に「代表性」を持たせる——「漱石は明治期を生きた男性なので明治男性の性質を有しているはずだ」のような——ことにつながっている側面は、否定できないだろう。

もちろん、文学研究者がこうしたことに無自覚だ、というわけではない。文学研究者の多くは、こうした批判は織り込み済みであろう。しかしながら、文学研究においては、社会学や文化人類学でしばしば話題になる「研究する暴力」<sup>34</sup>に関する議論は、管見の限りではあまり行われてはいない。むしろ「文学研究によって隠蔽されていた暴力に光を当てる」などと、論じる側の「権力」を肯定するものが多い。

以上、長い短所であったが、一方の長所には、再現性の獲得がある。

「時代性」や「地域性」を「原因」にした研究では、再現性が確保できる。つまりは、「同じ時代／地域」を生きた者にはこうした性質がおおむね当てはまる、ということになれば、それによって再現性を主張できるのである<sup>35</sup>。上でも述べ

<sup>33</sup> 中村香住「『属性』との付き合い方：『N/A』論」(『文學界』2022-10)。

<sup>34</sup> 岸政彦は、「逸脱やマイノリティの存在を社会の「病理」と捉えるような権威主義的な視線が、一九七〇年代以降の政治状況の中で根底的に批判されていった結果、研究という実践が内在的に持つ「権力性」みたいなものが、社会学の中で批判されていきます。[中略] それによって、調査というものがそもそも暴力なんだ、ということまで言われてしまいます。[中略] 研究すること自体が対象をカテゴリー化する権力だと言われるようになったという(岸政彦『社会学はどこから来てどこへ行くのか』有斐閣、2018、pp.18-19)。

また文化人類学においては、2000年前後に、「語る(研究する)ことの暴力」が盛んに議論された(太田好信『民族誌的近代への介入—文化を語る権利は誰にあるのか—』人文書院、2001等)。

<sup>35</sup> そもそも、作品を文学理論で読み解くことは再現性を目指すものであるといえよう。そして理論研究は「理論の確認作業」であり、理論が正しいことの例を一つ加えただけに過ぎ

たように、こうした研究において、作品はデータである。作品の特殊性や卓越性はほとんど考慮されない。むしろ「平均的」な作品ほど、研究的な価値が高いとすらいえる。

実のところ、「時代性」や「地域性」を読み込む研究のみならず、規範的な作家論においても、再現性は意識されていたのである。前述のように、作家論は往々にして作家の「特殊性・特異性」を論じるものであったが、それは「人格陶冶」の側面も持っていた。作家論は「小説を正しく読めば、作家の高潔な人格に近づくことができる」という前提でなされていたが、これはすなわち再現性が前提となっている。作品はサプリメントのようなものであり、正しく摂取すれば、作品を生み出した作家のような高潔な人格が身につく、というわけである。「はじめに」で述べた「『春望』は時や場所を越えて人々に感動を与える」のように、「優れた作品は時や場所を越えて人々に人格陶冶を施す」のである。

もちろん、文学研究におけるこうした再現性はあくまで擬似的なものであり、今まで、その真偽はほぼ不問に付されてきた。魯迅の小説を読めば本当に「魯迅精神」が身につくのかについて、実証的な研究が行われてきたとは言いがたい。今後の文学研究では、こうした部分における検証を行う計量的な研究が、盛んになっていくのかもしれない<sup>36</sup>。

## 5. おわりに

その昔、盛んに論じられた「社会主義リアリズム」においては、「典型」を描け」ということがキャッチフレーズとして叫ばれていた。社会主義リアリズムは

---

ないともいえる。「文学理論が、たいへんなスキャンダルとなった理由のひとつは、文学理論というフレーズそのものが、ほぼ撞着語法であるからだ。文学のような、なにものにも還元できない具体的なものが、いかにして抽象的な探求の対象となりうるのか。偶発的で個別的なもの、並はずれて魅力的な型にはまらぬ細部、気まぐれな衝動、拘束的なドグマや統一的なヴィジョンを打破するすべてのもの、そうしたものの最後の避難場所こそ、芸術ではないか。芸術の枢要な点とは、肩透かしを食わせることではないか——教条的なものの専制体制、現実を考察するときの図式的な観点、政治的行動のプログラム、政治思想の腐臭、官僚組織とソーシャルワーカーがこしらえる滅入るほど無味乾燥な未来計画、そうしたものすべてに対し」（テリー・イーグルトン『文学という出来事』大橋洋一訳、平凡社、2018、p.32）。

<sup>36</sup> 小説を読むと「共感性」が向上するという実験結果が発表され、話題となったが（David Comer Kidd and Emanuele Castano, *Reading Literary Fiction Improves Theory of Mind, Science* 18 Oct 2013. 日本語で読める記事には「小説を読めば共感性は培われるか」『THE WALL STREET JOURNAL 日本語版』2016年11月14日 <https://jp.wsj.com/articles/SB10780138144506903447704582435722102759802> 2022年9月24日最終アクセス）、Lena Wimmer, Gregory Currie, Stacie Friend, and Heather J. Ferguson, *Opening the closed mind? Effects of reading literary fiction on need for closure and creativity, Creativity Research Journal*, 22 Jun 2022. によると、この因果関係には「再現性」が認められなかったとのことである。

文学が社会に奉仕することを求めるものであり、すなわち「社会の矛盾」を文学において表現し、暴き、民衆に矛盾の存在を知らしめることを目的としていた。

「社会や民衆を超越する作家」のような存在、あるいは作家の個性などは認められず、作家はカメラとして、社会を忠実に映し出すことを要求されたのである。

本稿で論じてきた「時代性」や「地域性」は、この社会主義リアリズムと同じ傾向を有している。焼き直しといてもいいかもしれない。目の前の作品に特殊性を認めず、既存のカテゴリーへと閉じ込め、数多あるデータのの一つとして「この作品にもこの傾向が見られる」と論じていく研究という点で、これらは軌を一にしている。社会主義リアリズムは「科学的な文学」を指向したが、この意味でも、今回論じたような「時代性」や「地域性」を読み込む文学研究は、社会主義リアリズムの残滓といえるかもしれない。

社会主義リアリズムが廃れた理由は、何よりも作家に人格を認めなかったためであろう。中国においては、作家が共産党に奉仕することを強要され、結果千篇一律の文学作品しか生み出されなくなったことは、今さらいうまでもない。「時代性」や「地域性」から論じる文学研究は社会主義リアリズムと同じであり、それは作家、そして文学の死を招く」と軽々しく断言することはできまい。今のところいえるのは、文学研究において、「規範と実証」のどちらの道を歩むにしろ、昨今のアカデミズムを巡る状況下では、茨の道のりにならざるをえない、ということである。

(たかはし・しゅん 本学教授)